

『ジョン・ダン入門』
—背信と野心の詩人—

ジョン・ケアリ著
朝倉秀之訳

第七章 死

恐怖も希望も死にゆく動物には

関係がない。

全てを畏れ、望みながら、

終末を待つのは人間。

……

人間が死を創り出してきたのだ。^①

人間が創り出す死には、数限りなく種類がある。人間は個々に死について自分なりの考えを思いついて、賦与する形態は、自分が想像できる範囲と構造を示している。それが創り出す働きであり、話したり、考えたりすることができないうちに死んでしまう動物のような赤ん坊は別として、人間なら誰でも備わっているものなのである。ダンは、ウェブスターや他のジェイムズ一世時代の人々と同じく「かなり死に取り付かれて」^②いたのは周知のことであった。しかし、ダンの死に対する気質は、特別であったし、当時利用できるもつと人気のある死の形態の多くは、ダンにはほとんど、あるいは全くと言っていいほど興味がなかった。例えば、死の形態には、立派な古典の先例もあつて、ウォルター・ローリー

卿が『世界史』の有名な文章の中で賞賛もしていたが、ダンは「世界の勝者としての死」に心を奪われなかった。

ああ、雄弁で公正で力ある死よ！誰もお前に忠告などできなかったのに、できると信じ込ませてきたのだ。誰もあえてしなかったことをお前はやり遂げた。そしてこの世の人間ども全てが媚びへつらつてきた者をお前はこの世から追放し、軽蔑してきたにすぎない。お前は人間が持っているかなり肥大した偉大さの全て、誇りと残酷さと野心全てとを一緒に引きつりだしてきた。そして、この二つの狭い言葉、(ココニ ネムル)でそれを覆ってきた。^③

もちろん、この素晴らしい賛辞は不合理である。というのも、述べられている形態は存在しないからである。しかし、人間は、自分たちより上手く暮らしている者たちが罰を受けるだろうと感じたがるのは自然であり、この妄想の虜になって、人間は人気ある勇者としての死についてさえ何か方策を講ずることになる。ローリー卿の姿勢は、十七世紀には広く行き渡っていたし、今でも支持者はいるのである。

一方、ダンはいえ、死などは過小評価できるのだという方を好んだ。

ダンの死についてのソネットは、ローリー卿に対する応答だと言つてもよいかもしれない。

死よ、奢るな。お前を強力で怖ろしいと言つもののがいたところで、お前は大了なものではない。なぜなら、お前が打ち倒したと思つている人間たちは、死なないのだから。哀れな死よ、ただわたしをも殺せはしまい。休息と睡眠はお前の絵姿に過ぎないが、そこからたくさん喜びが出てくる。本体のお前からはさらに喜びが溢れ出るにちがいない。最も素晴らしい人間たちはお前と一番先に去つていく。骨休めと魂の解放のためでもあるのだ。お前など運命や偶然や王侯や絶望した者の奴隷ではないか。また、毒薬や戦争や病氣と住まいを同じくしている。その上、芥子や呪文でもお前に劣らず、いやお前の一撃より上手に眠らせることができるのだ。だから、お前など威張れはしまい。短い一眠りが過ぎれば、わたしたちは永遠に目覚めるのだ。そしてもはや死はない。死よ、お前が死ぬ番だ。⁽⁴⁾

この詩の力強さの部分こそが、この詩の中の議論のとても弱いところである。その釣り合いのとれない論拠は、全く納得いかない順序にぶちまけられていて、内的な混乱を反映している。話者は、明確に納得しようとしているが、ひどく失敗してしまい自分が睡眠が死よりも良いと言いたいのか、それともその反対なのかを決めかねてさえている。先ず、最も取るに足りない根拠に基づいて、死が睡眠よりも良いに「ちがいない」と言う。それから、睡眠が死よりも良いと決めるのである。そのソネットの最後の文章は、その構築物の最後を飾ることを意味しているのだが、実際にはその構築物を倒している。死は怖ろしくないと最初から主

張した後で、ふざけて本性をさらけ出すことで、最後にあえて脅威としての死を（「お前が死ぬ番だ」）使うことができるのである。話者は、素晴らしい劇的な結末に足を踏み込んで、まっすぐ落とし穴へと落ちていく。「お前が死ぬ番だ」は、その行為を台無しにするが、その詩を改善する。なぜなら、その理由付けがいかにか話者の基本的な恐怖に影響を与えることが少なかったかを示しているからである。同様に、そのことから、私たちは自信過剰になっている前述の詩行のこじつけを読む必要はなくなっている。

このソネットから私たちは、それとなく心配ごとが存在するのを感じる。その心配ごとからダンの入念に死を信用しないで過小評価する企てが出發したのである。しかし、私たちはこのソネットが無くてもその心配ごとについては知るべきである。なぜなら、『父なる神への讃歌』の中でダンが、それを直接声に出しているからである。

わたしには恐怖の罪がある。最後の糸を紡ぎ終え時、
この浜辺で死に絶えてしまうのではないかと。⁽⁵⁾

死に際して止めてしまうような信仰は、確かめることのできる事実には十分合致するのである。その事実とは、いかに信心深くあろうと、人間なら必ずある時点でその信仰が出てくるはずだということである。聖職者たちが説教をしているにも関わらず、おそらくその信仰は、いつも人類の大多数の根底にある絶望的な思い上がりであったのであろう。ダンの同時代の人たちが熱心に読んだその思想のローマ・ストア派の哲学者の中にセネカがいた。彼は、頻繁に起こる喘息の発作の間中、どのように身体を鎮めていたのかと、死ねば無になつてしまふという愉快で勇氣ある考えとを結びつけている。死んでしまえば、全く生まれなかった

と同じになる、とセネカは自分に向かって言った。「死とは、存在しないだけである。これは、わたしがすでに知っているようなことである。死とは、わたしの前にあつたようにわたしの後ろあるのと同じになる。」⁽⁶⁾

この教義に対する反応は、大部分その人が自惚れているか、もしくはその自惚れが欠けているかに掛かっている。その人の存在そのものが消滅することなど考えられない出来事と見たり、あるいは、悲しむべき出来事とさえ見るためには、自惚れがかなり進んだ状態でなければならぬ。ダンの自尊心は、私たちが見てきたように、強く効力を発揮したし、戦わなければならぬ個人の消滅という絶え間ない感覚によってさらに効力が発揮されたのである。結果的には、絶滅してしまうという見方は、セネカが諦めを伴って見ているが、ダンとは大きく本質的に相反している。ダンの目的は、死について書くとき、生より死をもっと活動的で、積極的に行うことである。だから、死という何もしない状態を否定することである。

事実、言っていることは、「死よ、奢るな」という議論をいい加減なものにしてしまうかもしれないが、休止（「休息と睡眠」）を伴う死の状態なのである。というのも、これは最もダンらしくない言い方だからである。また、ここでもダンは非凡だった。死者たちは眠っているのだという穏やかな作り話は、広く当時の人たちの共感を得た。それは、深く浸透した決まり文句になった。いわゆる、全体的に不完全な医療体制の時代にあつて現在の国家医療制度の代わりである。マクベスは、他の人たちの間でびつたりしたこの世の疲れはてた口調で作り話に同意している。

ダンカンはいま墓の中だ、

人生という痙攣する熱病も癒えて安眠している。

反逆が暴威をふるったのも過去のことだ、いまはもう剣も、

毒も、内憂も、外患もなに一つとして
彼にふれることはできぬ。

事実、正統的なキリスト教の教えは、死人の魂が墓に留まるのではなく、ただちに永遠の罰か、報われるかを知るために出掛けるというものだった。富める者とラザロについてのキリストの物語は、この証明として使われた。というのも、ラザロが死んだとき、天使たちにアブラハムの胸元に連れて行かれ、ラザロは富める者がすでに地獄にいるのを見るからである。だから、死には休息などないし、キリスト教徒である詩人は、意識的に忘れることよつてのみ存在するのであるという振りをすることができない。その詩人たちがその思いつきに浸っているのを止めさせることではない。すなわち、その直感的にそうあつて欲しいことが、キリスト教の決まった教えより優れているということである。

しかし、それはダンにとつて全く魅力はなかった。ダンは一般的に陶醉することを望んではいなかった。ダンの精神は、穏やかに忘却の彼方へ入っていくという考え方を避けていた。友人のヘンリー・グッドイヤーに手紙でそう述べた。

死がほくを眠りにつかせはしないだろう。単にほくを掴まえた
り、ほくに死んでいると宣言するだけではなくて、死がほくを
打ち負かし、ほくを征服してもらいたいものだ。ほくが難破せ
ざるを得ないとき、海の中で災難を招くだろうが、ほくの無力
さは言い訳を見つかるかもしれない。そこは、ほくが泳ぐのに
練習さえできない陰鬱で雑草の多い湖ではないのだから。⁽⁷⁾

死は、とても考え込ませるものだから、強靱な努力を引き出す機会と

なる。相応しい死の床の葛藤とドラマは、ダンを引きつけた。ダンのエネルギーを集中させるからである。葛藤とドラマがなければ、死など死ぬ価値はほとんどない。ダンには、死が挑戦してきていると見ていて、悲しみを誘うものと見てはいない。それがまた、死についてのダンのイメージを決まり切った考えと区別している。ダンの中の死は、決して悲しくないと言つてもいいし、決して単純に悲しいのではない。ダンは、ヴィクトリア朝の人たちや私たちが考え出すようには葬送の調べを奏でることとはできなかった。その礼儀正しい遠慮は、ダンには取り澄ましていると思わせたであろうし、その哀れっぽい諦めは、臆病者であると思わせただであろう。ダンの友人であるジョージ・ハーバートの母親であるダンヴァー夫人を記念するために説教をしたとき、ダンには会衆にダンヴァー夫人の亡骸に今何が起こっているのかを思い起こさせようと格別の努力をしたのである。「あなた方が今足で踏み付けているその身体、その身体は……今や、わたしが語っている間も、より小さいもの、より小さい塵に変形し、砕かれています。だから、生命はないが、動いているのです。」³それが、ダンの機知に富んだ逆説である。すなわち、ダンヴァー夫人が記念の葬式の礼拝の間、動き回っているということである。事実、彼女は会衆の中で最も活動的な教会員である。なぜなら、彼女は身体あらゆる小片と一緒に動いているからである。人が想像するように親戚たちが大いに瞑想したいと願う事柄の外観ではない。しかし、ダンは想像する。ダンにとってそのことは、ダンヴァー夫人が眠っているのだと主張するよりもっと魅力的である。なぜなら、死を活性化するし、単純で不活発な死の状態から救い出すからである。

ダンの恋愛詩の中で、死は一つの範囲に入り込んでいく。その範囲は、どうやら他のどんな詩人とも一緒に衰弱させてしまおうらしい。五十四の『恋愛詩』の内、優に半分を越える三十二が死を組み込むのを手段として

いる。ダンが死んだり、あるいは女が死んだり、あるいは二人ともに死んだりする。ダンが女に別れを告げるとき、ダンには死の海原を感じている。その海原は、ダンがグッドイヤーに宛てて書いたものであり、ダンを飲み込むために待っているのである。他の詩の中でダンは、亡霊であり、あるいは解剖学の標本であり、あるいは掘り起こされた死体である。驚くべきことは、死んでいても、いかにダンが活動的で、影響力を持続しているかということである。死が実際に殺すのだということは、ダンが捉えることのできないように思える死についての一つの事実である。そして、このことは単純ではない。なぜなら、ダンはキリスト教徒の詩人であり、魂の不滅を信じているからである。というのも、私たちが見てきたように、他のキリスト教徒の詩人たちは、魂の不滅を信じていたし、あたかも死が眠るがごとく安らかであるかのように死について書くことができたし、しばしば書いたからである。他方、ダンと一緒に死人が歩いたり、語ったりする。死ぬことは、『遺贈』が私たちに告げているように彼らがたびたび行動に移す事柄である。

ほくが最後に死んだとき、ほくはきみの許を
去るたびに死ぬのだ……

たとえこんな風に死が生命に組み込まれないときにも、ダンは死の自分の自身がお注目の的であり、生きていくものに対してもっと重要であり、生きていくもの以上に彼らと一緒にいてもっと影響力があると想像する。彼らはダンに祈り、ダンから本当に愛とは何かを学ぶことになる。二者択一的に、ダンの解剖された死体は彼らの間で不快な影響を広め、『毒気』の中でのように伝染病のごとく彼らをふき取ってしまうであろう。

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ほくが死んで、医者たちには死因が判らない。

それでほくの友だちが好奇心から

ほくの死体を解剖させ、各部を調べたがる。

その時彼らはほくの心臓にきみの絵姿を見つける。

きみが考えるように突然の恋の毒気が

人々のあらゆる感覚に入り込んで

彼らにもほくと同様に働き、きみが犯した殺人を

大量殺人へと名前を変えるだろう。⁽⁹⁾

その努力は、根気強く死を生命の形態として扱うことであるし、情熱的に生きることに関わっている詩の中で死に活動的な役割を与えることで死に生命を与えることである。このような詩の中で私たちが感じ取れることは、死んだ後、人は簡単に忘れ去られて、他の人々の生活の方は全く変わり無く続いて行くだろうという考えに負けてしまうという怖れである。気前良く放棄することは、自己を抹消してしまふことだから受け入れられない。ところが、ダンは自分が死ぬとき、消滅するのは自分ではなくこの世であるという自己中心的な妄想を抱いている。『遺言』の中で述べているように「ほくは死ぬことでこの世を滅ぼします。」⁽¹⁰⁾

死は、恋愛詩の中でよりもさらに明確にダンの宗教詩の中で幅を利かせている。ダンが神について考えることは、死について考えることである。すなわち、そのことだけがダンを神に結びつけるからである。ジョージ・ハーバートがそうであるように、生活者として陽気に神との交わをするには、ダンには向いていない。ダンの描く神は、死の王国にお住まいになっている。ダンが神を礼拝するのは、死を支配する神を礼拝するのの意味している。ダンが死を切望する一つの理由は、死がどっちつかずに終止符を打つからである。死ねば、ダンは最後には自分が救われる

のか、救われないのかが判ると思ったのである。最後の審判は怖かったけれど、ダンはそれを願わずにはいらなかった。

丸い地球の想像上の荒れ地に立って、吹き鳴らせ、

天使たちよ、その合図のラッパを……⁽¹¹⁾

死は明確であり、人生は混沌である。死が人を引きつけるのも、重大局面だからである。一度死が入り込むことで、俗なる詩でも、聖なる詩でも、ダンがいう自己劇化となり、詩が緊急で極めて重大になるのである。嫉妬心と、いつもの気持ちが入り交じり、ダンは人間の歴史上最も重大な死の場面に取り掛かり、指揮を執りたいと願っている。

ユダヤ人よ、わたしの顔に唾を吐きかけ、脇腹を刺せ、

この身を叩き、嘲り、鞭打ち、十字架につけるがいい、⁽¹²⁾

死は注目的として使われる。私たちが感銘を受けるのは、ダンが永遠の崖つぶち立っている、あるいは、そう彼自身が言うからである。

ああ、わたしの黒い魂よ！今お前は召喚されている

死の先触れであり、闘士である病によって……

あるいは、

今こそわたしの劇の最後の場面、ここに天はわたしの一生の旅路の最後の一マイルを定め、わたしの走りは、怠惰のうちに、しかし素早く終わり、この最後の歩幅を残すのみ、わたしの人

生の最後の一寸チ、残る数分の最後の瞬間……⁽¹³⁾

これはその語り手の言葉を聞く最後の機会であるという語り手が繰り返すお知らせは、私たちを脅して注意を向けさせることになる。まるで一人の男が十階の窓の横木に立ってふらついて叫ぶ言葉のようである。

それゆえに、ダンには死を人生の最後であると考え、拒否したのである。死はダンの文章の中で生きること以上にダイナミックであったし、もつと華やかであった。死は好奇心をくすぐる上でも豊富であった。ダンには好奇心を燃やすのが好きだった。というのも、好奇心ゆえに死が生き生きとし、興味が湧くように思えたからである。恐怖の部屋とか、あるいは特別に風変わりな知識の箱のように。「存在するものであれば、必ず誰かを殺してきている」とダンには『祈祷集』の中で面白がつて述べた。「ピン、櫛、引つ張られた髪であれ殺してきた。」⁽¹⁴⁾人々は、死に到るまで自らを笑うことと知られてきた、とつけ加えている。初期の詩の中で、ダン自身は身の毛のよだつほど詳細にこの小さな皮肉を肉付けして、一人の男を想像する。男は、喜び過ぎると発作で破裂してしまう胸に不治の潰瘍を持っていて、丁度ダンが自己管理することで治療を喜んでいてる時に、自分の喉に出てきたり、窒息させるような締めりのない粘膜の潰瘍に罹ってしまう。⁽¹⁵⁾詩は、特に弔いや葬式の歌など死んだ後で人々のために素晴らしい冒険を創り出すのである。詩は目眩のするスビードで空中に浮揚する。真つ直ぐに太陽を通り越して飛んで行き、地中の黄金に向かって行く。死が詩を解放し、魔術的に詩を変形してしまう。例えば、葬送詩の中でマーク夫人は、ダンが書いているのだが、劇的に亡くなった後の肉体を發展させる。

……潮がぬるぬるした浜辺を洗い流し、
砂の上に綺麗な作品を残すように、

彼女の肉体は死の冷たい手で精製される。⁽¹⁶⁾

これこそがその場合の一つであって、私たちは大胆で乱暴であるが、全体としては繊細で分かち合う仕方でも共通点のない経験を積み上げていくダンの微妙に連想していく心の移り変わりを見ることが出来る。死体に触れることと砂浜で歩く素足に波の形を感じることは、冷たく驚くように固いという点では互いに似ているが、他のあらゆる点ではあまりにも離れているから、ばらばらの感覚を目的を持った形に合わせようとして、死のための新しい顔を見つけようとしていたりする精神だけが、その類似性を捉えることになる。死の最も身の毛のよだつ形態でさえ、ダンには活気あるものになってしまう。『第二周年詩』は、処刑された直後の斬首された男の身体の中で、観察できる痙攣する反射運動を魅せられたように記述するのを織り込んでいる。犠牲者の首は完全に切断されて、血がそこから噴き出していたが、ダンには次のように観察している。

両目はびくびくと動き、舌は巻き縮む

彼は招き寄せ、自分の魂を呼び戻そうとするみたいに。

両手を掴み、足を引き寄せ、自分の魂に

到達し、会うために前に進んでいるよう見える。⁽¹⁷⁾

ダンヴァー夫人が腐敗しているにつれてダン自身がグッドバイヤー宛ての手紙で心に描く死と競泳するのを考え合わせると、これこそは躍動であり、休息などではなく、想像力を駆使することで躍動といえ、ダンには死を連想するのである。死者と死ぬことは生きることよりもつと壮大

に生きている。

最も躍動的な死は、自己を苦しめることである。それだけでその犠牲者に殺人者であることの魅力と勝利を与えてしまうのである。ダンの自殺願望は、年季が入っていた。歴史的な事件と神学的な著作の両方を探求しながら、自殺の社会学について熱心に読書し、論じたのである。ダンの第五の『逆説』は、「あらゆるものは自殺するのである」という主張を展開し、おそらく一六〇八年に最初の英語版の自殺の弁明を書き、『自殺論』、自殺は自然な罪ではないから決して悪いことではないかもしれない、というその逆説、主題の宣言」という題で出版（実際にはダンの死後まで出なかつたのだが）された。ダンの博學で細心の注意を払う研究は、キリスト教社会以前と以後に留まらず動物の世界の自殺までも網羅している。結論つけているのは、その訴え方が普遍的である。「あらゆる時代、あらゆる場所、あらゆる機会にあらゆる条件を整えた人間が自殺に愛着を感じて自殺しようとしてきた。」ごく些細な場合を示そうと、人々は自殺の口実として使うであろうし、また自殺を企てた高尚な人物は、ダンが序説で引用しているが、有名な同時代の神学者アオドル・ベザ^①の場合であるし、そこからダン自身の告白を導き出している。

ベザは、頭全体を覆っていたフケで苦しんでいただけなのに、一度パリのミラー橋から飛び込み溺れ死ぬところだったが、たまたま叔父さんがその時その道を通り掛かって助けてくれたのである。私にも時としてこんな風に飛び込みたくなることがある。それが良かれ悪しかれ、私が最初に育てられ会話を交わしたのが実は死を軽蔑し、思い描く殉教を渴望することに慣れている抑圧され苦難するローマ・カトリックを信じる人たちだっ

たからである。あるいは共通の敵は私の中の敵に対して閉じられた最悪のドアを見つけ出すべきであるとか、その教義自体の中に頑固さと融通性があるべきだとか、神の賜物を頑固に妬むことはないし、他の罪深い一致は私の中のこんな思いを伴わないことを私の良心がこれまで私に確信させてくれるからだとか、如何なる苦悩が私を責めたるときはいつも勇敢な恨みや弱々しい臆病が良心を生むことになり、私が手中に獄の鍵の束を持っていると考えている。いかなる救済策も私自身の剣のようにそんなに素早く私の心に届きはしない。^②

ダンの論旨は、ハムレットの「生きるべきか、死ぬべきか」のように、時代の合い言葉であった。人々は自殺が明白な非難に値することに疑問を持ち始めた。伝統主義者たちが何世紀にもわたって是認してきたことであるのだが、自分の喉を掻き切る権利は、特別に目指して争って勝ち得る解放的な目標とは思えないかもしれない。しかし、十七世紀を震撼させることになった権威主義と個人の理性との間の一つの葛藤であると正確には見られていた。もしもダンの思想のつかみどころのない考え方の間で『自殺論』の情緒的な中心を探すなら、私たちはそれをダンの律法の服従拒否と個人的な自立の主張の中に見出すことになる。ダンはその律法主義者たちが強調する「詭弁を弄する教え込み」をあざ笑う。

どんな法律もそれほど基本的かつ純粹ではない。しかし、策定された論拠は前もって想定されている。そしてどんな論拠もそれほど一律でないが、その情況によっては改正されるのである。その場合、一個人が一番偉い……。そしてその人の良心は十分に抑制され、公平無私であるがゆえに、自己保存の論拠がその

人の中で終わるのは確実に、同様にその法律も終わると考えられるかもしれないし、そうでなければその法律に反していつかたどるかもしれない。¹⁹

社会的地位にある市民なら私たちの時代と同じくダンの時代でも確かにこの恐ろしい議論を見出すはずである。もし人々がどちらかの法律に従うのかを自由に選ぶなら、社会は混沌して崩壊するであろう。自殺反対の事例は権威主義者たちによって公布されているが、通常、自殺は共同体への義務をないがしろにする市民を意味するという『国家の倫理』からのアリストテレスを引用することで、いつも国家に対する個人の義務に強調点が置かれていた。しかしながらこの議論は、哲学者たちを満足させはしたが、全体的な説得力に欠けている。平均的な自殺というのは、その人が国家よりも自殺そのものに関心があるのだし、もしただ一回限りの自分の人生を過ごすことができるなら、国家も取り替え可能なものがあるから国家なしで上手くやっていけるかもしれない。

国家の論拠は難攻不落というわけではなかったから、立法上の基準はさらに説得力を持たせるように作らなければならなかった。キリスト教社会であるヨーロッパでは、十九世紀まで自殺に失敗した人々は処刑され、上手く自殺できた死体はバラバラにされて晒され、その土地は没収されるのが普通だった。英国での自殺者は慣例上市中を引き回され、打ち抜かれた杭を付けたまま、十字路に墓なしに埋葬された。²⁰自殺について市民の心配は理解できる。もし自殺することに人気が出てしまうと、労働力と収益の供給を奪うことになるかも知れないからである。しかし、教会の反目は判断するのは容易くはない。私たちが今存在している不幸から自由にしてくれるというキリスト教の死後の約束が与えられているなら、自殺は本当に信じている人にとって唯一の理にかなった道で

あるように思えるかも知れない。事実、初期のキリスト教信者はこのことに気付くのに鈍感ではなかったし、自殺することに熱心になってしまったから、結果的には教会がその規則を厳しくするようになった。ドナトゥス派は、故意に殉教を擁護してきたのだが、聖アウグスティヌスに厳しく非難された。論じられた自殺は「忌まわしく非難されるべき犯罪」であった。あの第六戒を廃止するのは臆病であったし、神の慈悲を断念していることを示していた。²¹聖アキナスは聖アウグスティヌスの怖じけづかせる議論を敷衍し、その議論を望ましい自殺の利点を整然とした文章にまとめた。²²何世紀にも渡ってこれが教会の見解の権威ある記述となった。

ダンには『自殺論』の中でこの固定化した感受性の無さを熱っぽく時には異常なほどの迫力で攻撃した。ダンの流れるような煙に巻くような文章は、今不可解に省略したかと思えば、冷笑的に明解だったりしたりして、馬鹿にしたり機知に富んだ文章の間にあつて、熱を帯び息もつけない雰囲気を持っており、激しいほどに哀れみ深いのである。ローマ・カトリック教会の教義の中でダンを激怒させるのは、哀れみが欠如していることと優れた知恵が単なる口当たりのよい仮説になっていることである。ローマ・カトリック教会は自殺者が神の慈悲を切望しているのをどのようにして知ることができるというのか。その自殺者が改悛の情がないのか、それほどに呪われているとどうして推測して言うことができるのか。「改悛の情がないと推測することなど、神に呪われずにそれを聞いたのだから、権利侵害なのである」とダンは抗議する。²³表面上、ダンの不平は十分理にかなったものだと思う。というのも、自殺者が改悛を表したり神に慈悲を探し求めるノートを残すことが多いからである。ウォルター・ローリー卿がロンドン塔で一六〇三年に自らを刺し貫いたとき（不首尾に終わったのだが）、自殺者が絶望して死ぬかどうかという

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

「議論の余地のある問題」を指摘する手紙を先ず作成したのである。「神よ我を許したまえ」は、ヘイドン^②が自分の頭を弾丸で打ち抜く前の日記に記した最後の言葉^③であった。一方、ローマ・カトリック教会はもしその自殺者が本当に改悛の情があるなら進んで自殺などしはしないものであると強気に主張したのである。疑問は、ただ選んだ自殺の手段によつては死に際して次々に悔い改めが起り得る場合である。悔い改める自殺者のノートは、天国に入る資格を得るためには自殺をしてから書かれなければならない。ダンは完全にこの一連の詭弁に気付いてはいたが、本当に言いたい論点は誰にも他人の脳の中で起こっている事柄を決定する権利はないのだということである。独断的な法令を基にした憶測に対して個人の意識を弁護している。それは内的な自己の複雑さに基づきたりと符号する一人の詩人から推測できる事柄である。ダンが苦痛を込めて付け加える一つは、本当に改悛の情があるのかを調べるのに、聖クレメンス^④が言うように、何度も何度も悔い改めの行為を続けないうことであるなら、それこそ自殺者が改悛の情ありと考えられる良い例証ということになる、^⑤のを明確にできる。ダンが主張するのは自殺者の心の状態など非難することが出来ないだけでなく、「神が同意する旨の言葉を述べることで」^⑥自殺できるといのである。聖書注解者たちがサムソンの自殺の厄介な事実の辻褃合わせをするのは常識だった。その議論というのは、サムソンは神のご命令によつて自殺したのだから、特別であるというものである。しかし、とダンは反論する。もしサムソンがそうであれば、なぜ他の人はだめなのか、と。私たちの理性が自殺せよ、と告げたり、理性が人間の中の神の声を代表しているというローマ・カトリック教会の教えを受け入れるなら、自殺に対して神が究極の責任をお取りになることは疑問の余地はないように思える。ダンの自殺に対する思い入れの中で、キリスト教世界の歴史と伝統を大胆に調べ尽くしてい

る。たとえば、もし聖餐を受けるために母親の体内から手とか足が出ているなら、まだ生まれていない赤ん坊でも正式に洗礼が受けられるのか、という重大な問題のような教会が抱える論争に対してスターン^⑦みたいな趣向を展開している。傲慢なほどに厚かましく、ダンはあたかもキリスト教の殉教が全く疑いもなく死の願望の現れにすぎないかのように取り扱う。死を願うことは、キリスト教以前には、異教徒の儀式の中で男性の葬儀に際してその妻たちや召使いたちが集団自殺をするような華々しくはないけれど、しなければならぬ行為と見なければならなかったからである。ダンは初期の殉教者たちが過剰に自殺したい衝動に駆られるという説明に着手するとき、死という奇怪でスリル満点の状態で魅せられることで途轍もないスケールの殺人の興奮と混ざり合うことになる。全軍は自爆した。死刑執行人は疲労困憊で脱落した。熱狂者は一番最初に死ぬことに満足した。まるで自殺することが「日常の楽しみ」であるかのように。「多くの者が火あぶりになるという理由だけで洗礼を受け、子供達は死刑執行人を怒らせ挑発することを教えられ火に投げ込まれた。」^⑧何でダンが喜んでこの血の池に飛び込んだのかは、単に自殺を正統化しただけではなかった。なぜなら、殉教という行為は実際のところダンの議論のその部分には全く本質的ではなかったからである。ダンは書かされたのである。というのは、ダンのように殉教の行為は生命と比べて死を目立たせ目的に溢れたものにし、同時に、死は殉教者の目の中では生命の終わりではなく、生命の出發になるという理由で、殉教の行為は死ねば無であることを消し去ったからである。

現代の読者にとつて、『自殺論』の中の最も極端な主張だと思われるのは、イエス・キリストが自殺したのだ、という点にあつたにちがいない。その本の最も繊細な二十世紀批評家ジョルジュ・ルイス・ボルヘス^⑨はこれが全作品の中の「重大な目的」^⑩であると考えている。ダンが論じて

いるキリストの死は「不屈の精神である英雄的行為」であった。なぜなら、キリストは自分を殺す者どもに喜んで自らを捧げたからである。「わたしの羊たちのために我が生命を捧げる」というような言葉の中で自殺の意図を明確にし、十字架の上で死が意志の行為であることを示す素早さで亡くなったのである。ダンが述べるように「殉教者の多く」は、「生きたまま多くの日数を十字架上で吊るされ、盜賊たちもまだ生きていた。」聖アウグスティヌスも聖アキナスもキリストの意志が死ぬ唯一の根拠であることは意見が一致している。しかし、もちろん二人ともそれを自殺とは呼んでいなかった。聖アキナスは、十字架の聖書の記述から判断して、キリストが全く突然に自らの生命を短くしてしまったことに注目している。一方でまだ十分肉体的な頑丈だった。「なぜなら、最後の瞬間にイエスは大声で叫ぶことができたからである。」他の注解者たちはイエスは頭を垂れたことに注目した。すなわち、私たちの頭が死んで垂れるように頭を落としたのではなかった。ダンにとってこの理論の魅力は考慮すべきものであった。述べられている神は、人間を自殺に駆り立てているだけでなく、自ら自殺してしまったのである。さらに、キリストの自殺は特別に偉大なものであり、神に相応しく作り替えられたものである。キリストはやすやすと超人として死んだ。何も必要ではなく、「ただ自分の魂が出るようにと命ずるだけであった。」^⑧死はキリストにとって医学的な崩壊ではなく、意識的に勝利したという表れであった。太陽を目を閉じれば消してしまうように。そのような思想は、特にダンの自我へと繋がっていた。

『自殺論』は他の誰よりもダンにとって一番重要であった。一六四七年にそれが出版されたときでさえ、おしなべてほとんど一般の興味を引かなかつたし、人々だつて自分たちの生活を支えるための議論で大いに感銘したようには思えない。アントニー・タックニーは、ケンブリッジ

の神学部の勅任教授であつたが、一六五〇年代にこう言ったのである。もし記憶が正しいなら、ダンの本によって自らを毒殺しようとして糾弾される人物になつてしまった。モルホーフの『博学家』の中でダンに影響を受けた「かなりの」自殺者のことを述べているが、何らの証拠も全くあげていない。ルクレティウスの翻訳家トマス・クリーチは自分の書齋でダンの『自殺論』の初版本を読んでいる間ロープをもてあそぶようになり、遂には首つり自殺をしてしまった。しかし、ルクレティウスもダンと同様に責められるべきであつたかもしれない。^⑨しかしながら、その本が誘因としての実行の妨げになつていたにもかかわらず、ダン自身はその本のことを喜んでいたし、ダンがそれを見せた友人たちがその論理の誤りを指摘することができなかったことも喜んでいた。ダンは、ケンブリッジ大学とオックスフォード大学の学者たちが、その本を読んだ「確かにこれには誤つた道筋があつたが、簡単には見つけられない」と述べていたことを報告した。一六一九年にダンは大事に保管してほしいと頼んでロバート・カー卿に原稿のコピーを送つた。きみがその本を見せようとする友人になら誰にでも言つて欲しい、これは「ジャック・ダンが書いた本であつて、ドクター・ダンが書いたのではない」と。しかし、若者特有の浮かれ騒ぎとしてその本を取るに足りないものとするこの企ては真実とは思えない。原稿を保管することについてダンの憂慮を計算に入れていない。ダンがカー卿宛てに送つたのは、帰つてこないかもしれない外国旅行に出掛けるところだつたからである。もしダンが外国で死んでしまつたなら、『自殺論』が聖職者の論文の間に出回つて厄介な論文になるであろう。明らかに一番安全な方法といえれば破り棄てることであつたであろうが、そうすることもできず、どちらでもないようにロバート・カー卿に致命している。すなわち、「ぼくが生きていれば、保管してくれたまえ、もし死んだら、印刷することも火にくべることも禁

ずる。出版しないでくれ、でも燃やさないでくれ。この中できみが良いと思うことをやってくれ。」⁽³¹⁾ ダンは保管して欲しいと思っていた。なぜなら、その本は、ダンの考えをいつも引つ張りつづけた足どりの理屈に合った正統性と、ダンがケンブリッジ、オックスフォード両大学の経験から判断して反駁できない正統性を示していたからである。それも『自殺論』を存続させたいというダン自身の意識に負っていた。この本を書かなければ、ダンには、ダン自身が証明してきたように、平凡で自然な熱意というよりむしろ強情な罪としての死を切望することを考えなければならなかったかもしれない。その原稿は、いつも使用できるような膨大な自殺ノートを構成していた。

私たちが見てきたように、ダンには自分がなぜそんなに自殺に駆られたのか、ということを理解することができなかった。さらに『自殺論』の序文は、ダンがこのことを認めてはいるが、おそらくダンの病的執着の強さについて全体的な真実を述べてはいない。ダンには、そこで言うように「どんな苦痛が私に襲うときでも」いつも自殺に駆られる。しかし、グッドイヤー宛の手紙でダンには自殺の考えを持ち出すのにどんな不運も必要ではなかったことを書いている。「わたしが時代とともに進むときに同じ自殺の気持ちがあつて、今以上に公平な希望を楽しんでもいた。」⁽³²⁾ ダン自身が困惑したときに説明を企てることは、無遠慮であるようにも思えたが、同様に抑え難く、偉大なフランスの社会学者エミール・デュルケム⁽³³⁾の自殺についての古典的な著書が、私たちがそれを決定できる限りでは⁽³⁴⁾ダンの精神状態に著しく近い類似を提示する。

もちろん、デュルケムは自殺をむしろ社会構造との関連から説明できる現象として提示することに関心があり、個人的な精神に対してではなかった。自殺を超社会的な原因のせいにする教義を否定し、様々な

国々や文化的な集団から統計を収集し比較することで、プロテストント主義や離婚の法制化のような社会的要素を孤立させることを求める。社会的要素によって間違いなく比較的高い率で自殺が発生するのを示すのは可能である。しかしながら、この社会的要素によって個人の精神に加えられる圧力があるから自殺が生じてくるので、デュルケムが発見したものの心理的な意味合いは重大である。そして、デュルケムが人間は社会学的な法律の側面から自殺するものだと信じていることを時として与えてしまう印象があるからと言って、私たちは社会的要素から注意を逸らすべきではない。

デュルケムが区分する自殺の三つの型の中で二つの自己中心型自殺と没価値状況型自殺は、ダンの場合に関連しているように思われる。自己中心型自殺は、個人が社会とか家族に同化出来ない状況から生まれる。人を生活に結びつける絆が和らいでいるのは、社会の結びつきがゆるいからである。自己中心型自殺は、自己陶醉である。

その環境の激変の中で「自己中心型自殺者」の意識は自己に心を奪われるようになり、意識自体をその適切でユニークな対象と取り、主要な仕事として自己観察と自己分析を企てる。……もし他の存在との豊かな結合に溶け込みたいなら、自らを与えることではなく、自らの愛について瞑想することである。⁽³⁴⁾

これをダンの恋愛詩や魂の最も尊い行為が「魂自体に反映しているもので、魂を熟慮し、瞑想する」⁽³⁵⁾という主張に応用することなど、あらためて示す必要はないであろう。ダンがあえて破片追放⁽³⁶⁾の感覚を持っていることは同様に明かである。ダンには背教することで、その中で育ったにもかかわらず支えてくれたカトリック教共同体から自分を切り捨てた

のである。出世できなかったことで、独りぼっちで役に立たない感覚を持つてしまった。グッドイヤー宛の手紙は、そこで自殺願望の気質を告白しているが、まるでその関連が分かりきっているみたいに、すぐ就職できなかったことと靈魂消滅の感覚だと述べている。「ぼくは喜んで何かするだろうが、何であるか言えないのは不思議ではない。なぜなら、選ぶことはすることだから。しかし、身体の一部でもないことは無になることなんだ。」⁽³⁶⁾これは行き過ぎた個人主義の自殺効果についてのデュルケームの記述に奇妙なほど一致しているのである。

私たち以外に対象がないとき、私たちの努力が最後には無に帰してしまおうという考えを避けることは出来ない。なぜなら、私たち自身が消えるからである。しかし、靈魂消滅は私たちが恐怖に陥れる。このような状況下では生きて行く勇気を失うであろう。⁽³⁷⁾

恋愛詩の中で忙しい現実の世界からダンと恋人が隔離されていること、二人の自己充足を誇ろうとダンが頻繁に要求すること、『聖列加入式』や『形見』の中でのように死に向かって脱線するためにこの自己充足についてダンが気に病むときのダンの精神の傾向などは、全てデュルケームが描き出す自殺の孤立型に匹敵するヴァリエーションとして見ることできる。

社会の中の暗部を取り去ると、デュルケームの自殺の孤独も社会の目標を奪われる。デュルケームの功績は自分以外誰にも現実味がないし、彼の活動は単に要点が無いのではなく架空と感じ始める。夢の中に生きている。このほんやりした意識はダンの書き物の中では間違ようがない。ダンが主張する人生の喜びは、単に満足しないだけでは、存在しないの

である。「神学論集」が述べるように、名誉と楽しみは「無である」⁽³⁸⁾ 高慢は宗教的な憂鬱よりも深く進み、形而上的な基盤がある。ダンが『祈祷集』の中で論じているように、場所と時は存在しないのである。私たちが対象の場所として見ているものは「せいぜい空気のすぐ隣のうつろな面積」である。流動的で計りがたい空間があるだけである。その中で私たちは、不条理と知りつつ固定点を捉えようとする。時に関しては、私たちが過去、現在、未来と分けるが、過去と未来は存在しないし、「現在と呼ぶものも、そう呼んだ瞬間と同じ今ではない。」だから、時は、場所のように「想像上の半ば無」である。これは私たちの幸福の基盤であるから、ダンが論じているように、私たちの幸福は存在すらもしていないということになる。⁽³⁹⁾ダンの経験の現実についてのこのような疑いは、宗教詩のダンの絶望の源である。それがダンの野心と挫折した形で結びついていたかもしれない。人生で成功したいという熱い思いは、成功は意味がないと悟ることと共存しなければならなかった。このような条件の中で、成功を渴望することは貪欲になることと無駄だと思ふ気持ちになることである。自殺か、気が狂うかが答えである。そこでダンの場合には、詩となったのである。なぜなら、そのことが両方の態度を持つのに十分受け入れる余地があったからである。『ソングズ・アンド・ソネット』の数編の熱意は、他の著作にもあるが、人生の可能性を疑うことと合致するのである。ダンが断言するように、愛など努力に値しないのである。

ぼくたちは、この虚しい泡沫の影に対して、
安らぎも貯えも名誉もこの一日も支払うのか。⁽⁴⁰⁾

「ぼくたちの喜びはすべて幻想にすぎない」と『像と夢』は絶望して

述べている。「ああ、本当の喜びはせいぜい夢で十分だ。」愛の瞬間が激しく本物であるように思えるときですら、他のあらゆる瞬間を犠牲にして起こり、夢のような霧の中に覆い隠す。「しかし、これは全て喜びの幻想である。」⁽⁴¹⁾

この失望の型を含んでいるダンの詩の中の現在は、ダンと別の自殺の分類と結びつく。すなわち、デュルケームが没価値状況と呼んだものである。没価値階級の自殺者たちは、個々人である。その個人に対して社会組織が人間の目標や大志に有効にもたらす統制された効果は、一つの理由か別の理由で、作用するのを止めてしまっている。単純な例は、突然の貧困とか突然の金持ちになって圧倒される男の話である。その人物に対して通常の目的とか人生の報償とかは消えてしまっている。没価値状況にある自殺者の別の共通の形態は、離婚した人々の間に起こる。離婚した人々は、特定の階級の人々をもう一度選ぶよりも自殺してしまふ傾向が強い。これは、離婚した人々が結婚の提供する決まった目的や満足を捨て去ってしまうことに耐えられないからである。達成できない目標を追求する人なら誰でも、自殺の没価値状況の危険に晒されているかもしれない。デュルケームはこの状況を特に商取引における制限のない経済目標の現代的追求と関連づける。しかし、デュルケームが示すように、たぐさんの他の種類の表明がある。何が全ての没価値状況の自殺を特徴づけているのかといえば、認知され限定された目標の消失であり、結果的には「無限に対する病的な欲求」である。それは、デュルケームが観察しているように、性の形態をとることである。没価値状況にある男は、自分にはそんな状況が起こればどこでも所属をはっきりさせる権利があるなどと言うとしても、いたるところに発散して無になることに満足する。この自殺者の型がその精神状態に近いことは、明確である。いわゆる、ダンは欲求の目的が公式化することを逃れて、際限のな

いほど達成できないということを宣言している『無関心』や『否定的な愛』の中で描かれるところである。しかし、自殺の没価値状況は、かなり広くダンの詩に関連している。私たちが見てきたように、無限への望みは単に恋愛詩の中だけでなく、全発言を通しても辿ることの出来るダンの思想の特徴である。ダンは著しく忠実にデュルケームが公式化しているような没価値状況の自殺の徴候を提示する。「経験した楽しみを越えて人は他人を意識し、求める。もし人が可能な範囲を使い尽くしてしまつたと見えるほどになったなら、不可能なことを夢みることになる。すなわち、人は非存在を渴望するのである。」⁽⁴²⁾

このことは、私たちがダンの野心の技法について見てきたことと相關している。その弊害を特別な状況にあったダンの教育の特質のせいだとしてしようとしている。もちろん、私たちはダンの休み無く不満足な氣質が単に知性を追求する結果であると言ふこともできる。あらゆることを疑問に思う精神は、疑問自体に危険を伴い、疑いの中に投げ込まれる。デュルケームが発見したように、何故自殺が無知な人々より教育を受けた文化的な人々の間でさらに一般的なのかということになる。しかし、ダンの時代の人々の多くは、教育を受けていたが自分たちの生活を終わりにしたいという気持ちを持ち出すことはなかった。育ちの中でさらに際だつた要素は、ダンの特殊な好みを説明するのに引き合いに出されなければならぬ。ダンを教育した人々の間で殉教に対する熱心さは、確かに関連していると言つてよい。特にダンが説明をあれこれ求めるときに何もましてこのことを選ぶ場合である。「わたしは抑圧をうけ苦しめられたローマ・カトリック教の人々と先ず一緒に話し合い育てられた。死を軽視することにも慣れ、思い描く殉教に飢え乾いていた。」

先ず、ダンが自殺したがっているという理由としてこのことを提供するのには奇妙に思われる。誰もが思いつくことではあるが、それはロー

マ・カトリック教会に入つて、危険な宣教の計画を立てたいという気持ちをもつと効果的に説明するかもしれない。しかし、ダンの要点は、十分にそのことを詳びらかにはしないが、自分の育ちによって自分が生活を越えて生活の目的を探ることが習性となつて、生活がもたらすあらゆるものの自分の究極の満足感を壊されてしまつたと言つていようである。適切にダンの努力に報いることの出来る唯一の事柄は、家庭教師たちがダンの注意を向けさせたもの、すなわち殉教だつた。しかし、ダンが自分の信仰を棄てたとき、この可能性は消え、ダンには無限と絶対に向かう目的は無いが飽くなき気質と死に対する欲求が残つた。その死への欲求は、カトリック教の關係と原理が見えないが、あまりにも鮮明に描きすぎて消し去ることは出来なかつた。殉教についてしばしば起る不安は、初期の詩からずっとダンの作品の中ですでに指摘されてきたことではあるが、ダンの神経症が出るこの重大さもそのせいにするとき、私たちの考えが正しいと思われる。ダンには殉教者になり損ねた人であり、一連の基本的な心理形態を持つて生きなければならなかつた。ダンを教育した人たちによつて死に向かうように方向づけられていたのだから。これは、他のどんな要素とも同じくダンの恋愛詩の中で容赦のない死を理解するのに役に立つはずである。それはまた、私たちがダンの宇宙の流れの理論に対する愛情を理解するのにも役に立つことになる。人間の個性を決まつて破壊することによつて、生命を絶え間ない死にしてしまふのである。

ダンにはデュルケームの分類にあまりにもすつきりと合うのでダンが生き残つてしまつたのは例外であると言つても良いように思える。しかし、ダンには自殺者ではなく、自殺を夢みる人だつた。もしダンに何が自殺を思い留まらせたのかを訊ねるなら、ここで問われる他の答えのように、その答えは推測するしかない。たぶん、一つの抑止力は、ダンの強力な

自己肯定であつたと思われる。事実、このことで、環境がダンに陰謀を企てたとしても、簡単にダンには自分自身の生命を取ることに奔走したであらう。なぜなら、自殺は自己破壊であると共に自己肯定でもある。その自殺は、不吉な星を振り捨て、堂々と自分自身の運命を選び取る。もはや犠牲者ではなく征服者なのである。禁欲主義の哲学がこの自殺の側面を強調するが、ダンの時代の若者の間ではセネカが人気を博していた。ダンには『自殺論』の序文で、不幸に対する自分の応答を堂々と述べている。「いかなる救済策も私自身剣のようにそんなに素早く私の心に届きはしない。」これは、十分にセネカの語り口であると言つてよい。

人生の最後の日々を取り扱うことが、死を遺言劇にすることだといふ決断力はいかにもダンらしい。伝記作者のアイザック・ウォルトンも述べている。説教壇で死にたいというが希みであつて、ダンはそれを叶えたと言つてよい。⁽⁴³⁾一六三二年二月二十五日、病床から起きあがると背筋の凍るような「死の決闘」といふ最後の説教をしたのである。ダンの身の毛のよだつ風貌は、会衆の間で肝を潰すほどの驚きであつた。「そのときダンの涙を見た会衆の多くは、ダンの弱々しく虚ろな声を聞いた。ドクター・ダンは、自分自身の葬儀の説教をしたのだ」⁽⁴⁴⁾とウォルトンは記録する。しかしながら、その話し振りは破滅的ではなかつた。ウォルトンの言葉信じるなら、⁽⁴⁵⁾ダンは進んで自分が死んで行くのを一つの芸術作品に変える方法を見出そうとしていたのである。ダンは大きな木製の壺と板を手に入れた。それから石炭の火が書斎で燃えている間、服を脱ぎ、経帷子を着て、頭と足のところで結び目を作り、じつと経帷子を着たまゝ、壺の一番上に立つて、他の人が想像するとグロテスクな芋袋競走の出場者よろしくバランスを取つていた。ダンは、画家が木製の板の上の等身大の肖像画を描く間そこにじつとしていた。死体として描かれたこの肖像画は、それからベッドのそばに吊るされていて、将来

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

何が起こるのかを思い起こさせ、面と向かっていると勇氣と名人芸を認識することとなった。後には、遂には迫り来る死を感じたとき、ダンは「両目を閉じて、それからおもむろに両手と身体を構えて自分に経帷子を着せに来た人々が僅かの変更も必要が無いようにと姿勢を整えていた。」⁴⁶ その素振りやそこに到達した行動が表明しているものは、ダンが支配するものであった。ダンは、自分自身の死を仕切っていた。このようにダンは、自殺が醸し出すその死の命令を手に入れた。「英雄的に」自殺したキリストのように、ダンは何時どのように死ぬのかを選ぶのを明確にした。詩の中で私たちは、同じ自己決定の態度を推理することができる。例えば、『別離、嘆くを禁じて』の出だしのように。

徳のある人々は穏やかに世を去るとき、
魂にそつと囁く、行きたまえ。……

だから、ぼくも溶けてしまおう。⁴⁷

ダンが強調するのは、二人が自由意志で死んで行くべきだということである。二人だけの運命を越えて力を発揮し、二人だけの死刑執行人であるべきである。二人を騒がしく引き裂くために幸福を周りに残す代わりに、二人がキリストあるいは徳ある人のように自らの魂に別れを告げつつ、厳かに自らの幸福を抹殺すべきである。同様に、自殺者の自己信頼は『最期』に道徳的な強さを与え、ただ別れを告げるよりもっと必然的にする。

さあ、さあこの最後の別れのキスから離れなさい。

これは二人の魂を吸い、どちらも蒸発させてしまおう。

幽霊よ、あちらを向いて、ぼくをこちらに向かせよ。

ぼくらの至福の日を暗い夜にしよう。
ぼくらは愛する許可を誰に求めたわけでもないし、
行け、言われるほど安っぽい死を誰にも負うていない。

行け、もし言葉が完全にきみを殺さなかったとしても、
ぼくにも行けと命じて、死でぼくを休ませてくれ。

ああ、言葉が殺したのなら、ぼくの言葉がぼくに働き、
殺人者に正当な報いを果たさせてくれ。

だからぼくを殺すのに遅すぎなければいいが。
行くことと行けと命ずることで二度死ぬことになる。⁴⁸

墓場のシーンで喜び溢れて死に掴まえられるロミオとジュリエットを思い起こす。自殺の約束をしてこの世を軽蔑する勇氣は、その詩が激励しているものである。恋人たちは、他の誰にも見られないだろう。恋において二人が類まれであったように、死においても自殺だけが権利を主張できる独立心を二人は大事にするであろう。二人はダンがグッドイヤー宛の手紙の中でそうなればと望んだように細心の死に出会うことになる。ダンは銃弾のように「行け」という語を使う。最初の連の終わりで女性に向かつてその語を提示する。第二連の初めで、その語を発射する。どっちつかずにその連を分けている無限の沈黙が広がる。その中でダンは強い意志で引金を引く。もちろん、すべてゲームである。鉄砲は劇場の衣裳箱からのものであり、ロミオとジュリエットもいつもそうしているように恋人たちは最後に平然と立ち上がる。その類の詩だからこそ、ロマンティックな悲劇とかオペラのようにきらびやかで害のない形式に死を提示することで死とともに生きることを学ぶことになる。それにその類の詩であるがゆえに、ダンが自分の自殺の思いに腕を振るうことで生

き続けることができた、と考えることもできるのである。消防訓練のよう
に自殺の訓練によって死亡数が減るのだから。

『愛しい人』の中でダンが死の練習の必要性について全く明解に述べ
ている。

愛しい人よ、ほくはきみに

愛想づかして行くのではない。

ほくにもっと相応しい人がいると

望んでいるわけでもない。

しかしとどのつまりは死ぬのだから、

戯れに我が身を慣らして

死を装うことでこんなふう

死ぬのも最善だ。⁽⁴⁸⁾

これは、女性に喧嘩をふっかけているのではなく、ダンが死ぬことに慣
れたいという単なる説明を残す口実に提示されている詩である。実際に
出発するのだが、ダンの出発は冗談なのである。一人は死ぬときは離れ
なければならぬから、慣れておくのも「最善」である。ダンの離
別は、小型の自殺であつて、その詩の流れのようにダンが女性をせき立て
自殺に相応しい穏やかで高貴な振る舞いで決行するように説得する。泣
いたりするのも単に不幸を増大させるだけである、と警告する。堂々と
平静を保つことで、その女性は運命を打ち負かすであろう。これが良い
ストア哲学の知恵であり、ダンがセネカの中にすでにそのことを見抜く
事ができた。セネカは同じように自分へ質問する者に死のリハーサルをす
ることを勧めている。「このように言うことは、単に自分の自由のリハー
サルすることを人に伝えることである。いかに死ぬかを習得してしまつた

人は、いかに奴隷になるかの誤りに気づいてしまつてから。」⁽⁴⁹⁾

一六一九年にドイツ旅行を準備することで、ダンはまだ死を茶化すの
を楽しんでいる。ダンはその旅行で自殺を考え抜き、自殺は勝利である
ことを結論づけた。これがきっかけとなつて、ダンが自分が旅行中に紛
失してしまうといけなから安全に保管してくれるようにと即座にカー
卿宛に『自殺論』を送ることにしたのである。同様に、モントゴメリー
夫人宛にも手紙を書いて「この英国から（おそらくこの世から）出てい
く」つもりです、と伝えた。⁽⁵⁰⁾ リンカーン法学院で幹部の人たちに別れ
の説教をしたとき、ダンが専属の神学講師であつたが、永遠の入口に立
つ人として語り、自分が信仰深い幹部たちの群れを牧会しているのだと
思い描いている。「わたしがあなたの方に再びお会いするのが、ここにいる
全てのものが死の門、ただし天国の門の中でありますが、そこをくぐつ
てからだとしなら、わたしはあなた方すべてにお会いできるでしょうし、
そこでわたしの救い主であり、あなた方の救い主になることができます。
キリストが彼の父であり、わたしたちの父に言った言葉です。すなわち、
あなたがわたしに与えてくださった者のうち、だれひとりとして失う者
はない。」⁽⁵¹⁾ 思い描く中で、ダンが脇を固める人たちと共に天国の素晴
らしく感銘を与える入口に到達しているのである。

事実、一六一九年の災難の前兆は、ほとんど根拠がなかった。本当に
十七世紀の旅行は危険だつたし、ダンが健康も優れなかつた。ウォルト
ンが言うように、ダンが肺病になつていと信じ込んでいた。しかし、
ジェームズ一世によりドイツ王子たちに派遣された大使付きの正式なチャ
プレンとしてドイツに向かつていた。ドンキヤスター伯爵に率いられた
この旅行は莫大な費用の掛かる職務だつた。ドンキヤスター伯爵にお供
している諸侯、ナイト爵、ジェントルマンたちがあまりにも数が多かつ

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

たので、ブリュッセルへの入場式で二十五から三十の馬車が通過するのに必要だった。ドンキヤスター伯爵が旅行の「桁外れの出費」は本国で不平の原因となった。特に伯爵が支払いに対して公的な基金から一万四千ポンドを受け取ったときである。ダンはより大きな慰めとか安全を得るという意味で旅行することなど、ほとんどできなかった。このような背景に対してダンの運命の告別は、劇的な状況を必要とする。ダンが自分の出発を記録するために書いた『キリストへの讃歌』、著者がドイツに最後に向かうときに』という詩の中で、ダンには難破や溺死を現実的には避けられないものとして見て、自分を運ぶことになる船の耐航性についての厳しい心配事を暗示する。そこで述べられているように、このようなことは「狂った精神の病んだ幻想」⁵³である。しかし、私たちはその詩を読みさえすれば分かることである。すなわち、ダンの自己を劇化する強い衝動があまりの力を備えたものを産み出してしまっているのです、その中に含まれる危険性のもつと現実的な評価を求めるのは非常識になってしまうであろうということである。

どんなに破損した船に私が乗り込もうとも
 その船はあなたの方舟で私のしるし
 どんなに海が私を飲み込もうとしても、洪水は
 私にあなたの血のしるしとなるでしょう
 たとえあなたが怒りの雲と共にいて、あなたの顔を
 曇らせるとしても、しかしその仮面を通してあの眼を
 知っています。人々が避けるときがあっても、
 決して蔑みはしないだろう。
 私はこの島をあなたに犠牲として捧げます、

私が愛した人々、私を愛した人々全て
 私が彼らと私の間に私たちの海を置いたとき、
 あなたの海を私の罪とあなたの間に置いてください
 樹液が地下の根を求めようように
 冬に私の冬の中に今私は行く
 あなた以外の誰もいないところに
 私が知る本当の愛の永遠の根がある。
 あなたもあなたの宗教も支配はしないのです。
 調和のとれた魂の魅力
 しかしあなたはご自分でその愛をお持ちになる、
 主よ、あなたは嫉妬深いように私も今嫉妬深いのです。
 もつと愛するようになって初めて愛していただけます、
 私の魂を解放してください。与える者が自由を得る
 ああ、あなたが私の愛する人を愛してくださいさるなら
 ああ、私をも愛さない。
 だから全ての人への私の離縁のこの書類に封印してください
 愛のあの弱々しい光が落ちる人々に、
 あの恋人たちと結婚せよ、青春の中で散らされ
 名誉、機知、あなたに対する望み（偽の恋人）
 教会は祈りには最高である。薄暗いから、
 神のみを見るために、私の視力は落ちる、
 嵐の日々を避けるために、私が選ぶのは
 永遠に続く夜。⁵⁴

ダン は 現 実 を 偽 り 伝 え る よ う け ゝ り 理 解 し て い る の で あ る 。
 ダ ン は 一 つ か 二 つ の 断 面 を 自 分 の 舞 台 装 置 に 取 り 込 ん で 、 そ の 残 り を 捨
 て る の で あ る 。 外 交 使 節 団 の 実 際 的 な 状 況 の 全 て が 抹 消 さ れ る 。 贅 沢 な
 馬 車 一 杯 の 荷 物 や 大 使 、 そ の 随 行 員 の ダ ン は 比 較 的 マ イ ナ ー な 一 員 で あ っ
 た が 、 跡 形 も な く 消 え て い る 。 私 た ち は ダ ン が さ ら に 消 滅 点 に あ る と 思
 わ れ る 船 の 上 で の 悲 劇 と 孤 独 を 描 き 出 し て い る こ と で 煩 わ さ れ る 。 「 裂 け
 た 船 」 と い う 言 葉 は 、 奇 妙 に 矮 小 化 し て い る 。 ま る で ダ ン が ボ ロ ボ ロ の
 布 製 の カ ヌ ー で イ ギ リ ス 海 峽 を 大 胆 に も 横 断 す る か の よ う で あ る 。 し か
 し 、 そ の 小 型 船 が 小 さ く な る に つ れ て 、 ダ ン が 大 き く な る 。 ダ ン の 方 が 、
 船 の 薄 つ ぺ ら さ と 比 べ る と 確 固 た る も の の よ う に 思 え る 。 ダ ン の 素 振 り
 は 巨 人 の よ う に な る 。 「 わ た し は こ の 鳥 を 犠 牲 に す る 」 は ダ ン の 手 で 一 掃
 さ れ 、 プ リ テ ン 島 は 覆 い 尽 く さ れ る 。

野 心 に 溢 れ た 立 身 出 世 主 義 者 と こ の 世 の 報 酬 を 高 邁 に 軽 蔑 す る 人 と の
 間 の 葛 藤 は 、 こ の 詩 の 中 で 、 全 く 赤 裸 々 で あ る 。 ダ ン は 名 声 、 機 知 、 希
 望 は 放 棄 さ れ な け れ ば な ら ない の を 承 知 し て い る が 、 そ う い う こ と を 放
 棄 し よ う と す る 際 に は 神 の 助 け を 願 い 求 め な け れ ば な ら ない 。 そ の 詩 が
 勝 ち 誇 る 放 棄 は 、 勝 利 だ が 厳 し い 。 「 偽 の 恋 人 た ち 」 と し て 希 望 を 人 格 化
 す る こ と で 、 ダ ン は あ え て 自 分 を 見 下 げ て き た 女 性 た ち の 老 齡 恐 怖 症 の
 場 所 を 見 出 そ う と さ え し て い る 。 シ ル ヴ ィ ア ・ プ ラ ス の よ う な 現 代 の 自
 殺 者 の 詩 の 中 で の よ う に 、 人 生 に 対 す る 嫌 悪 感 と 絶 望 感 は 、 難 な く 推 し
 量 る こ と が で き る 。 自 殺 に 踏 み 切 る こ と の 立 派 さ と 言 う 点 で 、 ダ ン は 不
 当 に 扱 わ れ て き た 全 て で 賠 償 を 受 け る 権 利 が あ る 。 こ れ は 自 殺 す る こ と
 に つ い て の 詩 で あ る こ と が 、 詰 ま る と ころ 、 全 く の 特 徴 で あ る 。 「 わ た し
 は 選 ぶ / 永 遠 の 夜 を 」。 ダ ン は ド ン キ ャ ス タ ー 伯 爵 の 外 交 使 節 団 の 取 り 巻
 き 連 中 を 自 分 の 頭 の 中 で 詩 に 入 れ る の が 明 ら か に 必 然 的 で あ る と 思 え る
 程 度 に 曲 解 し て し ま っ て い る 。 ダ ン が 暗 黒 の 中 に 飛 び 込 む と き 、 自 分 の

親 戚 で も あ る 殉 教 者 ト マ ス ・ モ ア 卿 の 記 憶 が 、 意 味 を 持 っ て 沸 き 上 が っ
 て き た よ う に 思 え る 。 最 高 の 祈 り は 最 も 少 ない 光 の 下 で 行 わ れ る と い う
 教 会 の ダ ン の 系 譜 は 、 モ ア の 『 ユ ー ト ピ ア 』 の 中 の 一 連 の 教 会 で あ る 。
 モ ア が 述 べ る よ う に 、 教 会 が 光 を 排 除 す る よ う に し て い る の は 、 ユ ー ト
 ピ ア の 賛 同 者 た ち が 暗 黒 が キ リ ス ト 教 信 仰 を 強 め る ⑤ と 信 じ て い る か ら
 で あ る 。 「 神 の み を 見 る 」 た め に 死 を 受 け 入 れ る こ と で 、 ダ ン は 殉 教 の 魅
 力 に 着 手 す る 。 し か し 、 い つ も の 通 り 、 こ の 詩 も こ の 究 極 の 点 で 強 力 で
 未 解 決 の 矛 盾 を は ら ン で い る 。 な ぜ な ら 、 も し ダ ン が 神 を 見 る た め に 死
 の う と す る な ら 、 決 し て 「 永 遠 の 夜 」 を 選 び は し ない か ら で あ る 。 永 遠
 の 夜 は 、 異 教 徒 の も の 、 セ ネ カ 哲 学 の 自 殺 の 伝 統 に 属 す る も の で あ る 。
 そ れ は 全 体 と し て 非 キ リ ス ト 教 で あ る 。 ダ ン が 抜 群 の 矛 盾 を 携 え て 取 ち
 て そ う す る の は 、 そ の 詩 の 最 後 で 異 教 徒 の 自 殺 の 莊 嚴 な 結 末 と 神 と の 合
 一 へ の キ リ ス ト 教 徒 の 殉 教 の 渴 望 の 兩 方 を 不 法 に も 自 分 の も の で あ る と
 す る た め で あ る 。 ど ち ら の 高 邁 さ も 捨 て 去 る に 忍 び ない か ら 、 そ の 二 つ
 は 緊 迫 し た 一 致 も ない ま ま に 全 て 平 行 し て 主 張 さ れ る 。

最 後 に 、 私 た ち は ダ ン が 神 学 者 と し て 死 を 構 想 し た 道 に 向 か わ な け れ
 ば な ら ない 。 ダ ン の 着 想 の 趣 向 と し て 自 殺 と か 「 ソ ン グ ズ ・ ア ン ド ・ ソ
 ネ ッ ツ 」 の 終 わ り 無 く 生 き 残 り 得 る 死 者 の よ う な 死 が 、 生 き 生 き と し て
 壯 大 に 表 現 さ れ て い る よ う に な っ て い る こ と を 見 て き た 。 こ の 目 的 は 、
 そ の 何 も 無 い 死 を 取 り 除 い た り 、 死 を 自 己 の 高 揚 に 変 え る こ と で 死 を 無
 効 に す る こ と で あ る 。 論 じ て き た よ う に 、 神 学 が 究 極 的 に 想 像 の 手 段 で
 あ る か ら 、 私 た ち は 宗 教 思 想 家 と し て の ダ ン が キ リ ス ト 教 の 死 の こ れ ら
 の 側 面 を 選 び 取 っ て い る こ と を 期 待 す べ き で あ る 。 そ れ が ダ ン の 想 像 上
 の 必 要 性 を 満 た し て い る の だ か ら 。 従 っ て ダ ン は 膨 大 に 並 んだ 想 像 し た
 も の か ら 取 り 上 げ る こ と が で き た 。 ダ ン が 選 ぶ 項 目 は 、 実 際 に は 除 外 す

るものだが、確かに現れている。

死後の生活の中で唯一の関心事は、肉体の復活である。ダンがあまりにもしつこくあまりにも詳細に思い起こしているのが永遠の残り全てを完全に喰い尽くしてしまうほどである。それは、私たちがダンの他の死の描写の知識から予測することができすぎない。死は、ダンにとって活動することを意味していたし、『かたみ』でダンが詠んだ「終末の忙しい日」である復活の日は、先例なしに活動的である。それは、歴史の中で最も大きな群衆を証し人とするであろう。誰もが自分の身体を取り戻し、これが神と天使の役割に関する統合体という巨大な活動を要求するであろう。それはダンが避けて通れない主題であり、ダンが断固として、またダンに細心の注意を払う批評家たちが感じているような、落胆させる肉体を想像する。実際の問題は、ダンの頭を抱えさせるようなものである。再現されねばならない肉体は「海の中で溶け込み、地の中で石となり、火の中で灰となり、空気の中で離散」してしまつたかもしれない。肉体が死んでしまわないうちでさえ、崩壊し始めていた。

その肉体の原子全ては何処にあるのか。浸食作用が喰い尽くしたり、肺が我々の腕や脚から息を吸ったり吐いたりするというのに。地球のどんな皺、どんな穴、どんな内部に千年以来の燃え尽きた肉体の灰の粒は全てはあるのか。海のどんな淵、どんな空洞に通常の洪水で溺れ死んだ肉体のどろどろしたもの全てはあるのか。我々の死んだ肉体の一つの液が蛆虫を産み、この蛆虫が他の液体全てを吸い排出する。それから全てが死に、全てが乾燥し、腐って塵になる、その塵は川に吹き流され、濁つた水はうねって、海に転がり込み、無限の循環の中で潮の満ち引きが起る。なお、どんな棚で真珠の種が根付くのか神だけが

知っている。この世のどんな場所にあらゆる人間の塵の粒があるのか。(預言者が別の箇所ですべて述べているように) 神は小声で非難の声をあげ、聖人たちの肉体を招く。目のさらさら輝く中で、要素の全てに散らされたその肉体は、栄光の復活の神の右の手のところに着席させられる。⁵⁶

このような文章から、ダンが肉体の復活に興味を持つのは、いかに特有の意味とはいえ宗教的でないのは明白なことである。それは、ダンが物質は変化するとする重大関心事から当然の結果である。死亡した人間の肉体が溶けて再生するのは、ダンの想像が産んだものであり、物質が流転するのに果てしない原野で風味づけしたことになっている。この見解から、死体を愛するのは錬金術よりましだとさえ言われる。

その上、神が塵をすぐさま肉体にしてしまう神の名による早業は、最終で決定的な方法で統合させたいという気持ちを満足させるのでダンに訴えるものがあつた。ダンは取り付かれたように、自分が散りじりに分解されることへの心配があつたのである。ダンはこの世の体系から外されている、精神も希望も無いままに中心からはなれ、拡散されていると感じていた。ダンは祈りをするについて述べたように「わたしは自分が散らされて、溶解しているのが分かる」⁵⁷。復活なる神は、それを止し、全てを一緒にしてくださるであろう。その考えの不思議さは、ダンにとって神が戦わねばならない困難を考えることで高められた。切断され出血すると、特に大陸間の旅行の増大する見解の中で特別の問題を含んだ絶対者が示めされるのであろう、とダンは思った。再統合される肉体は「東で腕を、西で足」を失つたかもしれない。すなわち、ヨーロッパで腕を、「数十年の間にアフリカとかアジアで」⁵⁸ 足を。肉体は「北で血、南で骨」を失つたかもしれない。それから一被造物が他の被造物

を食べるときに起こってくる微妙な困った問題がある。人間が魚に食べられるのを考えてみると、魚の身体に変わり、それからその魚が第二の人間に食べられる。どのようにして神は最初の人間と第二の人間を区別するのであろうか。ダンはこの愉快な取り違えについて何度も思いめぐらす。⁹⁸ 実際には人喰いの風習を行う国は、事柄をなお悪くするだけだったり、良くするだけだったりする、とダンは指摘する。他の人の胃袋に入るために何か変わったことが必要なのではない。終末の日に神は、事実直面にしなければならぬ。「人間の埋葬された肉体は草になっていて、草は動物に食べられ、その動物は人に食べられ、その人たちは他の人たちに食べられる。」⁹⁹ 神の仕事には天地創造以来、あらゆる食生活の綿密な知識が必要とされるであろう。

私たちはダンの復活の記述とダンが知っている他のキリスト教解釈学者の中で発見された記述とを比較するとき、食い違いが現れる。それによつて、私たちはダンが必要だと思つて自分の神学に課したその個人的な傾向を味わうのに役に立てることが出来る。最初に、人喰い人種と人を喰う魚によつて起こる問題は、ダンを悩ませはするが、他の著者によつてキリスト教神学の深刻な部分ではない。アウグステイヌスとアキイナスの二人ともこのような問題はもとを神を冒瀆しようとする人々によつて起こつたのだと強調している。肉体的な復活を信じている不条理¹⁰⁰を示したいと思つているだけなのだから。しかし、ダンの興味は統合にあって復活にはないので、ダンはこの極端な場合を特別に目立つようになっているのである。第二に、ダンはアウグステイヌスやアキイナスが説明するように、実際に神がどのようにこの難問の数々を解くのかという説明はしないのである。ダンの唯一の計画は再構築する力と、それに先立つ突飛に分散する状態を強調することである。このようにダンが単純に主張しているのは、神が所有権を決定することなど考えずに肉体のあらゆる

部分をもその本当の持ち主に返すだろうということである。

ダンが知らないふりをしてるもう一つの困難な問題は、物質は人間の身体の中で永遠ではなく、永続する流転の中にあるという事実に関係している。私たちが見てきたように、ダンが生命が変化していることを強調するときこの点を重視しているのである。しかし、それは肉体の復活に対する悲惨な障害を起こす要素である。なぜなら、私たちの肉体の繊維が断続的に再生されているから巨大な量の物質が死ぬときまでに私たちの肉体を通過していくことになるであろう。このどれくらいが復活するのであろうか。もし神がすべてを復活させるなら私たちは天国でグロテスクに体重が増えてしまうであろう。もしそうしないなら、私たちは完全には復活しないことになる。アウグステイヌスとアキイナスは共にこの難問で苦闘している。アウグステイヌスを最も心配させた一つの問題は、私たちの髪の毛や指の爪との関係である。というのも、生活の中でいつも切り詰められ、もしまとめて取っておけば、とても見苦しく見えるからである。異議を唱えてから、神が髪の毛や切った爪を復活させるであろうが、前の位置に付ける代わりに、もつと丸みを帯びるように肉体の各部分を補う詰め物としてお使いになるといふ結論に達する。一方、アキイナスはこの整然として無駄のない工夫に反対して、十分な物質が人間の形をとるために復活させられるだろうが、「もし私たちが物質全体のことについて語るなら、全部がまた復活するのではない。」¹⁰¹

ダンはこの困難な問題に無関心のままにいる権利はなかった。全体的な肉体の復活を信じているダンと万物の流転を信じているダンとは折り合いが付かなかつた。しかし、ダンの頭の中では分けられたまましまつてあり、両者の間で合理的な橋渡しもないまま、両方に言及し続けたようである。アウグステイヌスの再生する髪の毛や指の爪がついている肉体は、明らかにダンには受け入れられないし、アキイナスの完全な物質

の再統合はないということもなおさら受け入れられなかったにちがいない。事実、ダンはどこらにも言及しないし、直面する問題へのどんな二者択一の解決策も提示しない。ダンには合理的であろうとかなろうと、そのことはダンが思い描きたかったことであつたから、ただ自分の矛盾する信念に執着するのである。丁度同じ仕方、ダンには「永遠に続く夜」へと飛び込む異教の世界とキリスト教徒の殉教の神との合一に執着してきた。というのも、両方ともダンには受けのよい自殺に賛成の見解だつたからである。もちろん、ダンが自らの矛盾に気付かないと考えるべきではない。それは正確にはダンという存在の多種多様で調整されない感覚であつたからこそ、神が散りじりになつた人を再統合することで魅惑的にしているのである。

その再統合を完全にするためには、神は肉体を一緒に合わせなければならぬ。その時まではダンの強調するように、魂は不完全なのである。天国の中で肉体的に存在しなければならぬという妄想は肉体的に再統合するということ考えと同じくらいダンを悩ませた。ダンには深く魂と肉体に分離された心霊体のような薄っぺらな形だけで生き残るといふ見方をひどく嫌つていた。ダンの自我は、本人が地上にいるように天国で均質で完全に存在すべきだと要求した。従つて、ダンには復活した肉体は浄化されるのだという初期のキリスト教の信仰に異議を唱えた。すなわち、「薄く、微妙なものへ減ぜられ、還元される」状態である。完全で均質な肉体が無いままに、天国は不完全となるであろう。そのことは三位一体の神が肉体を創ることを決めた理由があるからだ。「無限の何百万の何百万もの世代」の間、三位一体の神はそうすることを止めてしまった。しかし、それから三位一体の神はその栄光がそれほど完全ではなく、「それが被造物から追加したものを受けるかもしれない。それゆゑに三位一体の

神は物質の世界、肉体の世界をお創りになつたから、肉体が生ずるのである」と悟つた。人間の肉体が天国へ入るかという質問について、ダンが関心を持った聖書の箇所は、マルコによる福音書第十二章二十五節であつた。そこでキリストは言う。死者から甦る人々は「天の御使いのよう」であるだろう。天の御使いは肉体を持っていないから、ダンがこの言葉を再解釈することが絶対に必要だつた。ダンには心配してこの言葉に向かい、復活すれば私たちの霊が完全である中で天の御使いのようにならうが、天の御使いはキリストの言葉がむしろ不注意にほめかしているように⁶³。「私たちの栄光の肉体の中で私たちのようになるようには決してならないであろう」説明することもある。

ダンには自分の魂が自分の肉体から離れて存在していると想像することは、とても合わないと思つたので、『ホーリー・ソネット』を書いていく時期にダンには魂は肉体とともに死に、終末の日に復活するであろうとする異端の見解を採用したのである。だから、「丸い地球の想像上の荒地に立つて」⁶⁴ダンには単なる肉体ではなく「死から甦ってくる／魂の無数の無限」を描き出す。⁶⁵しかしながら、この理論は死を見くびつたり元気づけたりするので、ダンが推進していることに反した。もし魂がしばらくにしる死んでしまうなら、死は本当には死んでしまうことになる。だから、その時点でかなり悩んで初期のキリスト教著者たちが提出したような賛否両論を調査した後で⁶⁶、ダンには正統的キリスト教の考え方を受け入れたのである。それは死ぬと魂が真つ直ぐに天国（あるいは地獄）に行き、その後で肉体に再び結びつけられるというものである。その問題に関わる困惑は現れているし、全くその通りである。なぜなら、二つの仮説の間で選択するとき、ダンには二つの想像上の概念の間で選ばなければならなかつた。その魂と肉体が融合することと死が活気を帯びていることの二つの概念は、深くダンを魅了したのである。たとえばダン

が結果として魂が死ぬことで肉体から離れると承認したとしても、そんなふうに分けられる形では融合されないが、ダンはその結論に幸福感を持つていなかった。ダンは孤立して魂が存在するのは「自然に反する」と主張したし、肉体の復活に先だつて天国で一時的に住む間に、不満足で不完全であると感じると主張した。⁶⁶

説教の一つで、ダンはあるとても信服しがたい注解を使って固執するのである。肉体の死と復活との間で本当は肉体には何も起こらないから、復活と死は同時であることが出来る。だから、魂は結局のところ肉体から離れて存在する必要はないのである、と。⁶⁷ダンは「我が病床にありて我が神への讃歌」の中で同じ望みを持っていたようである。

西と東があらゆる平らな地図の中で

(わたしが一つであるように) 一つである。

だから、死は復活そのもの。⁶⁸

その絶望的な理由づけがあるから私たちは苦悩の証拠に逆らつて捉えられた想像上の理想を知ることができる。

その熱意は自然に私たちに「エクスタシー」の詩人を思い起こさせる。その熱意があればこそ、事実が明らかにダンの意見に反しているときでさえ、肉体が魂と離れ難く結合することを主張するのである。魂が肉体から離れたとき、無能力にされてるといふのである。それはまた、肉体が結合力であると感じるのを思い起こさせる。その結合力をダンは詩的なことばを通して伝えるのである。それは想像上の女性について「周年詩」を書いた中に人間の機能が生き生きと溶け込んでいることをダンが微妙に認知していることを思い起こさせる。「人は言うかもしれない。彼

女の肉体が考えたのだ、と。」ダンは、想像上の目的のために自分の詩を作り出したように、自分の神学を作り出した。これを十分に高く評価するために私たちはダンが追求したものだけでなく、無視した神学的な問題を評価しなければならぬ。というのも、そういう問題が同じようにダンの個性を決定するのに役立つからである。このように、ダンが肉体の復活について真正面から悩んでいたというのは正しいけれど、他のキリスト教徒には最高に重要であると思われた復活のある側面が全くダンに関心を起こさせなかったのも同じように正しいのである。例えば、復活した肉体の体格と年齢は熱心に数世紀に渡つて神学者が論議してきたのである。復活した人々の誰もが同じ背格好であるのかどうか、もしそうなら、そこで神がその普通より小さい者を拡大するために余分な肉体をどこで調達するのだろうかというのが、学識ある多くの頭を悩ませていた問題であった。しかし、ダンは単純にこのような問題に興味を示さなかった。変形された者全ては真つ直ぐにされるであろうとか、全ての人は誰もが天国で最高に美しくなる⁶⁹とかという一般的に受け入れられている考えに同意を与えることなど問題外だったのである。それは、ダンの詩の中では単に視覚的な外見に関心などないとするれば、もちろん正確には私たちが当然期待すべきところである。

人々が復活する年令に関して、これは幼い子どもを亡くした両親にとつて気になる特別に辛い問題であった。両親は再び、よちよち歩く子どもを見るのであろうか、それとも父や母と認める大柄な見知らぬ人と天国で顔を合わせるのであろうか。ベン・ジョンソンはベストに罹つて死んだ幼い息子ベンジャミンのことを夢見たとき、「息子がわたしのところに現れたのは」とドラモンドに言った。「復活のときにそうなるであろうとわたしが考える一人の男に成長した姿である。」⁷⁰一方、ヘンリー・ヴォーンは、同様にその事柄にかなりの考えを持っていたが、成長した人間で

はあるが、新生児の形で復活したいと思っていた。なぜなら、その方がもっと純粹であると感じていたからである。

前進を愛する者もいる。

しかし、わたしは後ろ向きに進むであろう。

そしてこの塵がその壺に落ちるとき、

その状態でわたしは戻ってきた。^①

もっと人気のある考えは、明らかにジョンソンが心の中に持っていたものであるが、私たち皆が三十歳で復活するであろうというもので、アキナス^②によると肉体的に成長の完成を示しているからである。そしてまたキリストが死んだ年令であったと信じられていた。アウグスティヌスはその理論を編み出したのであるが、三十歳以前に死ぬ人々は他の人と同じ年令のグループに分類するのに必要な先任権を保証されるであろう^③、と説明している。

ダンにはジョンソンのように片親を亡くしていたし、ヴォーンのように自分自身純粹ではないことから来る正に問題を起こすタイプだった。しかし、ダンは一貫して死人が復活する若さと年令を考えるのを避けている。それは、復活の他の面について情熱的に関心があったという観点から、私たちを感動させずにはおかない。ダンが自分の失った愛する人々を再び見たいと思わなかったからではないのは確かである。「わたしは再びわたしの死んだ者を甦らせるであろう」^④と十八歳だった娘ルーシーが死んですぐに話した説教の中で宣言している。「墓はわたしの子どもを納めてくれるであろう」と十八歳の息子が死んだので友人のコケイン夫人を慰めるための手紙を書いた。^⑤ここでの言葉遣いは、ルーシーが死んだときの年令より若くなって戻って来るだろうと考えていることを暗

示している。しかし、その事柄は決定的ではいままで、復活について論ずる全ての中で、ダンが学究的にそれを論ずるのを控えている。それを調査しだすと支持したくない可能性にのめり込むことになるから、この問題には頭を空っぽにしておきたいと思つたのははつきりしているようである。

また私たちがその理由を見つけないのは難しくない。というのも、もし復活したジョン・ダンが三十歳で、あるいは他のどんな年代でもジョン・ダンであると決心せざるを得ないなら、それは昔存在していた他のジョン・ダン全てを復活から排除するであろう。統合に対する同じ思いによって、ダンには個性のただ一つの構成要素の部分の消滅を承認できなくなるが、復活のときに無常で揺れる自我を含んだ全ての自我はとにかく統合することをダンは信じることになった。ダンは保存され散りじりになって残るために選ばれようと自分が一段階へと成長することを望まなかった。ダンは一緒に集中されたいと思つていた。「赤い土から生じた天国の百合のごとく」^⑥とダンが表現したように「収斂された。」詩の中のダンの主張は、この複雑さに関連しているから、ダンを取り上げる人は誰でもダンの全てを取り上げなければならない。ダンを取り上げるために、神は受胎から死の床に至るまでのダンのあらゆる期間の罪を赦すと『父なる神への讃歌』の中で約束しなければならなかった。その時まで「あなたは約束してくださらなかった。」他ならない全てのダンがダンである。^⑦恋愛詩の間で『花』はこの自己中心的に包含されることの一つの答えを示している。ダンは「わたしの心のように、わたしの体を持つのを喜ぶ」^⑧女性のためにあくまで頑張る。正確には、復活について書くようになったとき、ダンが天国から要求することであった。『聖列加入式』の詩人は「五本の白髪」を数えることで、神学者として、あるいはその事柄に関しては自分の恋人の愛の特徴が自分で死んで甦る

まで自分の手足が溶けないでいるのを望む⁽⁹⁾『葬儀』の詩人としての個人の断片一つひとつのための同じ憂慮を示している。

復活した年令はダンには興味がなかったけれど、その体格には関心があった。キリスト教の理論家たちになが祝福した天国の側面の多くの中には、ダンが栄光であると思えるものは何もなかった。ダンが好奇心に溢れ挑むような特有の事柄の中でこのことについて語る。天上の領域の中でさえ、ダンは競う合うことを望んでいた。

……魂が天国に入るや、すぐに天の御使いたちに言うことが出来る。「私は君たち霊と同じもので出来ている。それ故に、君たちと一緒に立たせてくれ、君たちの神であり、私の神の御顔を見上げ、そこでこの肉体の甦りのときに、私は偉大な慰め主である神の御子イエス・キリストご自身の天の御使いたちに言うことが出来る。私は君たちと同じもので出来ている、肉体と肉体、肉と肉、それ故に君たちと共に私を座らせてくれ、御父の右の手に。」⁽¹⁰⁾

新しく到着して天国の他の住人たちと一緒に結論づけようとして、称賛に値する肉体に注意を向けるダンのこの考えは、滑稽であると同時に個性の全てでもある。死んでいても生きていてもダンは自己を削除したり、野心が無い状態ではいられなかった。ダンの至福の概念は、深く排他的に個人であった。ダンはあえて天国の調和や死者との再結合の喜びについて語る。しかし、これらは、ダンの個人的な上昇思考と比較される。「私があまりにも神のごとくあるから悪魔自身が私と神を区別しないであろう」とダンは嬉しがる。⁽¹¹⁾

このように想像しているものを漂う恐怖として読むときには、疑いもなく正しい。自己を告白する「恐怖の罪」はこの章の初めで述べられている。ダンは自分自身を再確認するために自分の保証を誇張したのである。結局のところ、死が絶滅を意味するかもしれないという恐怖は、死が断固として動き回り自己主張をやってみている一つ一つの背後に漂っていた。ダンが捏造したものである。たとえ死が魂と肉体の分離だけを意味するとしても、それはなお気に入らないことであつた。ダンの肉体の考え方は望み無く長い年月の分解を通して形成されたものでダンの心を苦しめた。その考えがあつたから、人間としての枠組みが打破する墮落した忌まわしいものについての容赦のない長舌舌を述べることができた。そのためダンの説教は、評判になつたのである。その激論の背後にある心理的な動機は、はっきりと自己弁護であると思われる。ダンは会衆に向かつてそれを向け直すことよつて自分の恐怖を和らげたのである。ダンの心の中に潜む恐怖が、何であつたのかということが、自分の会衆にショックを与えるための自分の得意な説教題の輝かしい一部分となつた。そしてこの範囲でダンは、それを熟達できたのである。肉体の腐敗について述べる最初の説教は、一六二〇年に行われた。⁽¹²⁾ その時までにはダンは妻を、特に可愛がっていた息子フランシスを、それに娘のメアリーを亡くしていた。ダンが愛し、赤ん坊時代から成長を見守つてきた肉体が朽ち果てていった。そのことで恐怖がもつと増したのである。この恐怖の圧迫感で、ダンがこの世の終わりになおも生きている人類の運命に興味を持つていたことが説明できる。このことは、ダンを夢中にするそれまで言及されなかつた死についての唯一の主要な神学的な問題であつた。ダンは説教の中で執拗にその問題に立ち返り、その論及は、自分の意見を明確にするために数多くの神学者たちに問い合わせてきたことを示している。問題点は、聖書自体の中にある明かな混乱から起こつ

た。聖パウロはコリント第一の手紙第十五章五十一節で述べている。「わたしたちすべては、眠り続けるのではない。全ては変えられるのである。」その節の読み方は、かなり論争的になった。(「私は聖書の箇所についてほとんど知らないし、もつと広く読む」とダンは述べた。)^⑧しかし、終末の日に生きている人々は死なずに、栄光に似合うようにある選択の手続きを取るという意味にパウロの言葉を解釈することも出来た。聖クリュストモスを含む初期の神学者たちは、ダンが注釈しているように、このように聖書の箇所を解釈してきた。しかし、もしこれが聖パウロの意味するところであるなら、ヘブル書第九章二十七節(「一度だけ死ぬことが人間に定められている」)の中のパウロの言葉と対立するように思われた。そして、詩編第八十九篇四十八節「だれか生きて死を見ず、その魂を陰府の力から救いうるものがあるでしょうか」のような聖書の文章とはもつと明確に対立する。ダンはその論点を集中して論じるのにこの聖句や他の聖句を引用するが、初期の聖書解釈学者たちが正しいかもしれないし、全ての人間が死ぬ訳ではないと最初に感じていたようである。一六一九年に説教したときには、「問題の事柄」であるが、想像ではキリストの再臨の時に地上に生きている人々は死ぬ必要はなく、その代わりにパウロの言う意味で「変えられる」であろう^⑨、とダンが結論づける。

何が理論的な興味以上にさらに問題となるかは、ダン自身が数少ない幸運な一人になると信じていたことである。「おそらく私は死ぬことはないであろう」^⑩と一六〇七年の手紙でグッドイヤー宛に書いていた。十七世紀の間では、もちろんそれは突飛な考えではなかった。この世の終わりには、切迫して多くの人々に期待されていて、その日付を預言する競走がかなり流行っていたのである。英国国教会は、立場としてこのような絵空事に不賛成の意を示した。その絵空事は、徐々に最後の審判の日が個人的な規則を楽しむ期間の後に来ると信じる短気な分離派教会

信徒たちの領域だに見られた。^⑪ 正統的な聖職者になったので、ダンが説教においてはこのような黙示録的な夢については冷静である。少なからずダンは、自分が実際にこの世の最終局面に生きているかもしれないし、第一コリント人への手紙に示されている生き残りの中に自分も含まれているかもしれないという望みをはっきりと打ちだしたのである。死ぬわずか四年前の一六二七年にもなつて、ダンは会衆に語った。皆さんや皆さんの同時代の人々は何年も地上にいるように定められているかもしれませんが、あるいは「目がぴかっと輝く中で(神さまがどちらかをご存知です)^⑫ 空中で変えられる」かもしれないのです。私たちが語ることが出来る限り、土の中に入って行かなければならなくなり、聖パウロが予表した生活からのより整然とした脱出が自分のものではないという事実には納得したのは、土壇場になって、実際には初めてだった。憔悴し死に打ちのめされた最後の説教の中で、ダンは地上の最後の人々とのようにその人々が「変えられる」のであろうかとの話題に立ち返ったが、「今死んで行く我々は」そこでの腐敗からの脱出は全くないであろうと付け加えた。^⑬

その間に、ダンは何年にもわたり聖パウロが語った変化は正に何を必要とするのか、どのようにして誰もが死ぬことを預言する聖句と折り合いをつけることができるのかを再考してきた。ダンは、聖パウロの言うのが地上の最後の住人たちは死を回避できるという意味ではなく、その人々の死は単に事実である、と最終的に結論づけた。人々の構成要素の部分は、即座に分離し、再び統合されるであろう。そしてこれは、天国へ入る目的のための真正正銘の運命として数えられるであろう。「肉体と魂が突然に溶解するであろう。それが死である。そしてその両方の突然の再結合が即座に起こる。復活である」^⑭とダンは説明する。このように人々は墓が崩壊するのと死と復活の間の期間を逃れるであろう。その

復活の間に大部分の人間の魂はその肉体から孤立して存在せざるをえなかった。私たちが見てきたように、この期間は特別にダンには不快であったし、パウロの教えに従う逃亡者たちの間でもっと理解できる数を制限するのがダンの強い希望であった。ダンがパウロの教えに従う人々の即座の死と復活についての結論づけを読むと、アウグスティヌスとアキナスが言ったことであつた。しかしながら、二人ともダン以上にその期間についてもっと躊躇いがちであるのは重要なことである。アウグスティヌスが言うのに、我々の「弱い理性」は最後の日に生きている人々に起こることを予見することはできないが、人々はおそらく一時的な死を経験するであろう、と。「不滅に変化する間の一瞬の死」⁽⁹⁸⁾アキナスが述べるのは、聖徒たちはその問題について分かれるが、「より安全でもっと一般的な意見」は誰もが死んで、死から復活するであろうというものである。この二つの現象はある人には同時であるかどうか、ダンはいえ判断をしていない。⁽⁹⁹⁾

しかし、ダンにとつてその考えは、かつて悩まされたもので、あまりに魅力がありすぎて捨て去ることができなかった。ダンはその仮想の確かさとして示している。死の異説としてのその考えは、ダンの要求にびつたりだった。なぜなら、死から死んでいる状態を奪い、肉体と魂を一緒にしたからである。同時に、肉体と魂が一時的にも識別でき、それから栄光を伴つて再結合されるだろうから、その考えにはダンが死と復活のもっと伝統的な記述の中で価値を見出したあの統合と自己を癒す要素が含まれていたのである。

おそらく単なる偶然ではないのであろうが、ダンがパウロの言葉についてこの解釈に強く心から賛成する初期の説教が一六二〇年に行われたその同じ説教なのである。一六二〇年の説教の中で初めて、ダンは自分が墓の中で肉体が腐敗することを懸命に力説する。その十分に身の毛

のよだつ状況の中で溶解する主題に面と向かう力は、そこからダンが希望を持つて逃亡するのだという確かな認識と一つとなつた。この説教とその後の説教の中でダンは「我々」として最後の日に生き残る人々のことを語るのが習慣となつた。「生き残る我々は雲の中に捉えられるであろう。」「我々は死ぬ、そして再び生きる、我々が死んだと他の者が考えないうちに」⁽¹⁰⁰⁾もちろん、「我々」という言葉は「その遠い時代にたまたま生きていたその我々キリスト教徒」に相当する曖昧な言い回しに過ぎないかもしれない。しかし、私たちが見てきたように、ダンが自分の人生のほとんど終わりというところまで自分と自分と一緒に生きている人たちは地球の最後の住人になることができると信じていたのであるが、「我々」の使い方は、ダンにはそんなに曖昧には響かなかつたと確信できる。死を活性化させたり、否定的にしたりするための想像的な戦略のあらゆるものうちで、これが最高に力があつた。というのも、いかなるまともな意味でも、決して死なないであろうとう望みを携えていたからである。

私たちがこのことを理解したとたん、「丸い地球の想像上の荒れ地に立つて」という出だしで最後の審判がさつさと起こるべきだ、と何故ダンがそんなにも滅茶苦茶に要求するのかの説明がつく。最後の審判の利点は、ダンの見解によると、歴史の中で他の誰もがそうなるように死んで腐敗していく必然性から自分を解放するであろう、というのである。詩が語るように、自分は「決して死の苦しみを味わうことのない」人たちの一人になるであろう。この個人的な利点を保証するために、ダンは躊躇することなく世界の破壊を命じる。その点で、それは自己中心主義を特徴的に展開している。その詩の第二の部分で、最後にダンの発言を止めさせるものは、急に終わらせる別の生活を考えたり、審判に急いで行く別の魂のことを考えることではなく、むしろ瞑想なのである。結局のこ

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

る直接的な啓示はダンには合わないことが証明されるかもしれない。その点で、ダンの救いは保証されないかもしれない。

結論として、ダンと比較してみる死に没頭しているときに最も逆説的であった。一方、ダンには自殺に引かれるのを感じていたし、この病的な気質は、数多くのダンの詩の中に表れている。他方、死と死の持つ何もないことにあまりにも抑えられていたので、ダンは一貫し、かつ巧妙に自分の技法の中で死に生命を吹き込み、まるで自分が死を免除された数少ない人々の一人であるかのように説教の中で語るのを好むのである。この二つの傾向は、相反するように思えるかもしれないが、そうではない。なぜなら、両方とも死を乗り越えたり緊張を和らげる方法を取っているからである。自殺は、死を活動的な生活の一部に変える。ダンは、忌まわしかったり劇的な形式の中で死を描き出す画家のように、死を元気づける。しかし、ダンはそれほどに素晴らしく元気づける。なぜなら、ダンは本当のものを扱い、偽物を扱わないからである。ダンにとって自殺者の中の傑出した実行者といえ、キリストだった。なぜなら、締めくくりに締めくくる自分の生涯を語りさえすればよかったから。ダンの死の支配は、全体的であった。通常の死に至る助けになるようなものを何一つ要求しなかった。ダンは『最期』の中の「行け」という語で自身と恋人を殺すほどに自己充足的であった。

死へのこの優位性はダンには重要であった。なぜなら、死は何にもまして個人を侮辱するようにダンを圧倒した。埋葬されたり腐敗したりすることは、ダンが最後の説教で述べているように（ダンは自分が他の誰かのように腐っていく事実にととうとう折り合うようになってしまったとき）「最も不名誉で、情けない中傷」⁹⁸であった。私たちの多くの者が死について訊ねたい質問は、（傷つけることになるのだろうか）決してダ

ンを悩ましてきたとは思えない。苦痛について心配することはダンの尊厳の下にあったのであろう。死は、ダンの自我には侮辱であった。死は、ダンを怖がらせて動かないものにしてしまった。ダンは人生においても技法においても、されるがままに死に屈服するのを拒否した。「死が私を眠らせようとしても、そうはさせない。」ダンは、死のいかなる形態をも黙許することができた。ただ死がダンを生きたままにしておく限り。

原注

- (1) W. B. Yeats, *Collected Poems* (2nd edn, 1950), 264.
- (2) T. S. Eliot, 'Whispers of Immortality', lines 1—16.
- (3) Raleigh, *Works* (Oxford, 1829), viii, 900.
- (4) *Divine Poems*, 9.
- (5) *Divine Poems*, 51.
- (6) Seneca, *Epistulae Morales*, liv.
- (7) Gosse i, 191.
- (8) *Sermons* viii, 92.
- (9) *Elegise*, 49.
- (10) *Elegise*, 55.
- (11) *Divine Poems*, 8.
- (12) *Divine Poems*, 9.
- (13) *Divine Poems*, 7.
- (14) *Devotions*, 44, 79 (*Meditations VII and XII*).
- (15) *Epithalamions*, 55.
- (16) *Epithalamions*, 57.
- (17) *Epithalamions*, 41.
- (18) *Biathanatos*, 17—18.

- (19) *Biathanatos*, 47.
- (20) 參照。 S. E. Sprott, *The English Debate on Suicide from Donne to Hume* (La Salle, Ill, 1961); and A. Alvarez, *The Savage God* (1971).
- (21) Augustine, *City of God*, I, 17–27.
- (22) Aquinas, *Summa Theologica*, II, ii, Q. 65, Art. 5.
- (23) *Biathanatos*, 30.
- (24) Sprott, op. cit. 17; and B. R. Haydon, *Autobiography and Journals*, ed. M. Elwin (1950), 650.
- (25) *Biathanatos*, 32.
- (26) *Biathanatos*, 178.
- (27) *Biathanatos*, 30, 58, 72, 65.
- (28) J. L. Borges, *Other Inquisitions 1937–52*, trans. R. L. Simms (1973), 89–92.
- (29) *Biathanatos*, 189–91.
- (30) Sprott, op. cit., 62–5, 78–9.
- (31) Gosse ii, 124.
- (32) Gosse i, 191.
- (33) Emile Durkheim, *Suicide*, trans. J. A. Spaulding and George Simpson (New York, 1951).
- (34) *ibid.*, 279.
- (35) Gosse i, 174.
- (36) Gosse i, 191.
- (37) Durkheim, op. cit., 210.
- (38) *Essays in Divinity*, 30.
- (39) *Devotions*, 88–9 (Meditation XIV).
- (40) *Elegies*, 81.
- (41) *Elegies*, 70.
- (42) Durkheim, op. cit., 271.
- (43) Simpson, 262.
- (44) Bald, 526.
- (45) 參照。 Helen Gardner, 'Dean Donne's Monument in St. Paul's', in *Evidence in Literary Scholarship*, ed. R. Wellek and A. Ribeiro (Oxford, 1979), 29–44, for a Sceptical view.
- (46) Bald, 530.
- (47) *Elegies*, 62.
- (48) *Elegies*, 36.
- (49) *Elegies*, 31.
- (50) Seneca, *Epistulae Morales*, xxvi.
- (51) Gosse ii, 123.
- (52) *Sermons* ii, 248.
- (53) Bald, 343–5.
- (54) *Divine Poems*, 48–9.
- (55) More, *Utopia*, trans. P. Turner (Penguin edn. 1965), 125.
- (56) *Sermons* viii, 98.
- (57) *Sermons* v, 249.
- (58) *Sermons* iii, 109.
- (59) *Sermons* iii, 97; vi, 156, 274.
- (60) *Sermons* vii, 115.
- (61) Augustine, *City of God*, xxii, 19; Aquinas, *Summa Theologica*, III, Q. 80, Art. 4.
- (62) Augustine, *City of God*, xxii, 19; Aquinas, *Summa Theologica*, III, Q. 80, Art. 5.

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

- (63) *Sermons* iii, 114; iv, 74; vi, 297.
- (64) *Divine Poems*, 8.
- (65) *Sermons* v, 385.
- (66) *Sermons* iv, 358, v, 274; vi, 75.
- (67) *Sermons* vi, 272.
- (68) *Divine Poems*, 50.
- (69) *Sermons* vii, 273.
- (70) Jonson i, 140.
- (71) Vaughan, *Works*, ed. L. C. Martin (2nd edn., Oxford, 1957), 420.
- (72) Aquinas, *Summa Theologica*, III, Q. 81, Art. 1.
- (73) Augustine, *City of God*, xxii, 15.
- (74) *Sermons* vii, 384.
- (75) Gosse ii, 261.
- (76) *Sermons* ii, 211.
- (77) *Divine Poems*, 51.
- (78) *Elegies*, 88.
- (79) *Elegies*, 73, 90.
- (80) *Sermons* iv, 46.
- (81) *Sermons* ix, 89.
- (82) *Sermons* iii, 91.
- (83) *Sermons* iv, 74.
- (84) *Sermons* ii, 198, 204—5; see also i, 232.
- (85) Gosse i, 173.
- (86) 参照。Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (1971), 141—3.
- (87) *Sermons* vii, 97.

- (88) *Sermons* x, 238.
- (89) *Sermons* iii, 103.
- (90) Augustine, *City of God*, xx, 20.
- (91) Aquinas, *Summa Theologica*, III, Q. 78, Art. 1.
- (92) *Sermons* iii, 103; iv, 74—5.
- (93) *Sermons* x, 239.

訳者注

- ① ゼザ Theodore (1519-1605) 《フランスの神学者、Geneva の Calvin と行動を共にし、ユグノーを援助・指導。Calvin の死後(1564) 改革派の代表として宗教改革権利の擁護に努めた。彼の手になる新約聖書のラテン語訳は『欽定英訳聖書』の資料となった》
- ② トインズ Benjamin Robert (1786-1846) 《英国の画家。歴史や聖書に題材をとった油絵を残した。Wordsworth, Keats との交友で知られ、政界や芸術界の著名人についての述懐を含む回想記 *Autobiography* (1847) がある》
- ③ クレメンス VII(1478-1534) 《教皇(1523-34) 離婚問題でイングランド王 Henry 8世と対立した》
- ④ スターン Laurence (1713-68) 《英国の作家: *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* (1759-67), *A Sentimental Journey Through France and Italy* (1768)》
- ⑤ ホルヘス Jorge Luis (1899-1986) 《アルゼンチンの作家》
- ⑥ デュルケーム Emile (1858-1917) 《フランスの社会学者》
- ⑦ 破片追放…古代ギリシヤで危険人物の名を陶器片・貝殻などに書いた公衆の投票で国外に追放した制度。